

第 105 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

## サイコーシス早期段階における就労支援

武士 清昭 (東邦大学医学部精神神経医学講座)

当院では 2007 年 5 月より、発症危険状態 (at risk mental state : ARMS) や統合失調症の初回エピソードなどサイコーシス早期段階の患者に対して、包括的急性期治療を行う大規模認可の精神科急性期デイケア「イルボスコ」を開設した。イルボスコにおける活動は、Falloon らが検討を重ねてきた Optimal Treatment Project (OTP) をモデルに介入を行ってきた。現在まで開設から 1 年 10 か月が経ち、当施設の総利用者数は 47 名となった。利用者の平均年齢は 21 歳であり、男性 23 名、女性が 24 名、統合失調症初回エピソード患者が 34 名、ARMS 患者は 13 名である。統合失調症初回エピソードの DUP (Duration of Untreated Psychosis : 精神病未治療期間) は 3.9 ヶ月である。

イルボスコにおける介入はインテンシブなりハビリテーションを目的とするため利用期間を 1 年間に設定しているが、この期間内で本人の希望する形で社会参加が可能になった割合を Re-start

Rate (RR) と定義し、結果はイルボスコ開設から 1 年経過の時点で 54 % と算出された。

本邦における精神障害者の就労の現状は、精神障害者の就労状況は一般企業と作業所、授産施設で労働する者を含めても、まだ 17 % と極めて少ない (厚労省資料 2008 年)。しかし非就労者の 62 % は就労を希望している、という実情がある。就労支援として行われているエビデンスに基づく介入のひとつに 1980 年代よりアメリカで実践されている individual placement and support : IPS モデルがあり、我が国においてもこれを採用する施設が増えてきている。McGorry らによると、サイコーシス初回エピソード患者への就労支援としても、IPS が有用であるとの報告もある (2008)。

当日は、近年の各国における就労支援の紹介と合わせてイルボスコにおける就労支援について若干の考察を加えて発表する。

(この論文は抄録集より転載しました)